

巻頭言

仙台市病院事業管理者 玉井 信

1960年（昭和35年）に国民皆保険制度の導入により、「いつでも、どこでも、必要なだけ」の医療サービスを受けられるという、人類の歴史始まって以来の医療制度がスタートした。その結果、世界一の長寿国（女性1位、男性3位）となり、乳児死亡率が最も低い国として、WHOによる保険医療システムの総合評価は191カ国中第1位（WHO, 2000）と報告されている。しかし制度発足以来、その是非が検証・議論されないままにほぼ50年が経過し、現在では「日本の医療は崩壊の危機にある」といわれる。それは高齢化の進展に伴い急激に増大した医療費とそのひずみが、受け入れまでの時間や受け入れ拒否などで話題になる救命救急医療、対応できる医療機関が急速に減っている小児医療や産科医療、過疎地域または限界集落と呼ばれる地域における医療をどうするか、またアルツハイマー病や脳血管障害に起因する認知症を中心とした高齢者医療など、あらゆる面にわたって噴出しているためであろう。

一昨年4月よりわずか2年半ではあるが、市立病院の運営に関わらせていただいた。そして昭和5年創設以来80年にわたって、市立病院が市民の健康と安全維持に果たした役割は非常に大きく、そこには諸先輩の並々ならぬご努力があることを学んだ。先にあげた医療の直面する諸問題にも、仙台市唯一の自治体病院として、必要かつ十分な医療を提供することが強く求められていることに対し、その時々々の市政担当者とともに、全力で対処してきた。その活動の歴史は、現在までにまとめられている「仙台市立病院55年のあゆみ」、「仙台市立病院開院70周年記念誌」に詳しく記載されている。このようにその時々々の活動を当事者の目で正確に記載することは、正しい病院の歴史を伝えるために不可欠であり、まとめられた諸先輩に心から敬意を表するものである。

一方時代とともに変遷する医療の内容、技術とそれに伴う治癒率の変化、疾病の特徴など、あらゆる診療の質に係わる変遷を記録しているのが本誌「仙台市立病院医学雑誌」である。忙しい日常診療に携わりながら、ある期間の個人、またはチームとしてのその活動をまとめることは並大抵の努力が必要であることはよく理解している。特に大学医局と異なり、同じ診療科の仲間に限られるなかで、日々自分の前に座る患者を誤りなく診断し、適切な治療を行うことは容易なことではない。しかしその行為は自分のそれまでの勉強と経験を如何なく発揮した結果であり、適切な医療行為を行えたときに得られる満足感は何物にも代えがたい。もちろんすべての症例が快刀乱麻のように診断し、治療できるものではないし、自分の知識をはじめ検査データや得られる画像も最先端のものではないかもしれないが、それらを総動員しながら謎解きを進めることもまた日常経験することである。その中からどこにも記載のない新しい症例に遭遇し、また多くの症例をまとめる中からある傾向が浮かび上がり、地域の住民に大切な医療情報として発することも大変重要な我々の役割であり、「科学」することである。そのような我々の日々の医療活動を記録することは、何にも代えがたい重要なもので、それが済んで初めて「医療行為が完結した」と考えることもできる。本誌を開いてみるとあらゆる分野にわたっており、いくつかの診療科では著書、論文数、学会発表いずれも大変努力され、それぞれの専門分野における活躍が推察され、素晴らしい活躍と心から敬意を表するものである。

記録としてまとめ、それを後世に残すことは、医療従事者にとって大変なことで、大きな努力を必要とすることであるが、その記録を医学雑誌として継続的に発刊することもまた大変な努力を必要とする。世の中の趨勢や、時の病院構成員の考え方などによって、その意義が蔑ろにされがちであり、時には中断を余儀なくされる例は後を絶たない。本誌が日本医学中央雑誌に掲載されており、国立図書館に永久保存されることを考えると、先人のそして現在の編集者に深甚の敬意を表するとともに、いつの日か誰かが本誌を紐解き、その記載に驚きの目で読んでくれるものと信じ、新たな発見に向けて毎日の診療に努力されるよう心より期待する。